日系アメリカ人のアンデンティティ研究の一試論

第二次大戦中の「忠誠登録」を中心に

村　川　庸　子

1．はじめに
2．研究史の新潮流
3．本研究の意義
4．分析の一試論
5．まとめ

1．はじめに

第二次大戦中の日系アメリカ人の強制収容政策は、アメリカ政府当局者の当初の思惑とは異なり、最終的にはアメリカ市民である二世を巻き込んで規模が拡大し、期間も長期化することとなった。一連の政策の中で行われた所謂「忠誠登録」[1]は、「アメリカへの忠誠の表明＝従軍の意志の表明」という前提のもとに、アメリカと日本のいずれかへの忠誠を表明することを求めたものであった。当局側からは単なる政策の整合性を保つための方策であったが、日系アメリカ人にとっては、「日本」という国家との精神的な紐帯の有無ばかりでなく、身近な家族、日系社会、さらにはアメリカ社会との実質的な関わりをも問われる、踏み絵的な鋭い痛みを伴う経験となった。その傷は長く尾を引き、アメリカが国家として正式に謝罪し、賠償を行った現在もなお、日系社会に微妙な影を投げかけている。彼らの迷いの跡はそのまま、結果的に、日米の二つの文化の狭間で、しかも両国の戦争という厳しい状況の中で揺れ動いた日系アメリカ人のアイデンティティの模索の状況を鮮やかに描き出すこととなった。

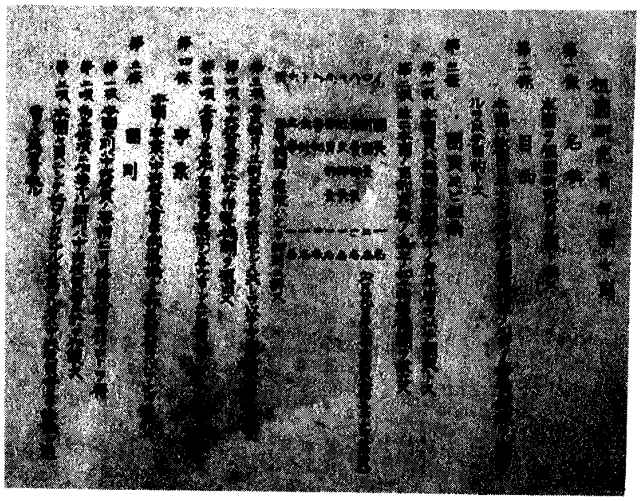
本稿は、20年前から行ってきた、第二次大戦直後の45～46年に日本へ「帰国」した日系アメリカ人の追跡調査[2]を土台とし、研究史における位置づけと、日系人のアイデンティティを考える際の資料分析の方法論的な試論を示すことを目的としている。

2．研究史の新潮流

日系アメリカ人史研究の中でも、第二次大戦中の強制収容・立退き政策の歴史的・現代的意義を問う研究は、もともとかなりの蓄積のみられる分野であるが、国家としての謝罪が正式に行われたこと、戦後50年を経て資料の公開が相次いでいることに呼応して、最近急速に見直しが進みつつある。ここでは紙面の都合で詳述することは避けるが、ごく大まかに(1) 60年代、(2) 70年代初頭から80年代の中葉、(3) 80年代後半から90年代に分けてその動向を見ておこう。

第一期の60年代は、収容所の開設期間にWRA (War Relocation Authority) のCommunity

◀Ｓ氏手作りのトランク。日記は戦後40数年、このトランクの中に保存されていた。

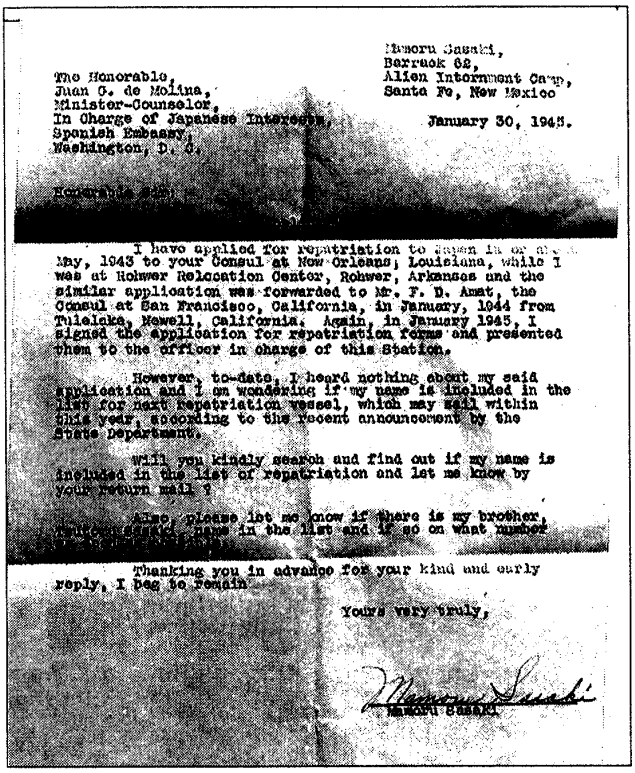


▲祖国研究青年団の記録

「記録　祖国研究青年団」と記された手書きのガリ刷りのパンフレット。第二条に「目的」として「本團は故国日本文化ヲ研究シ團員相互ノ心身ノ修養鍛錬ヲ企図スルヲ以テ目的トス」とある。

Analysis Sectionで作成した報告書類と、Thomas Swaineを代表とするカリフォルニア大学の社会学者で構成されたJERS（The University of California Japanese American Evacuation and Resettlement Study）という研究グループの収集した資料、まとめられた成果[3]を土台として行われていた。WRAに対する批判的なトーンは低く、戦中の社会的環境は厳しかったが、WRAの政策はあくまで人道的で当局者と日系人間にある種の信頼感があったと評価する姿勢が目立つ。JERSによって収集された資料や分析方法に関しては、歴史的な視点を欠くことや、一部の研究者と政府当局との不公正なつながりなどが近年厳しく批判されている[4]が、Sandra C. Taylorも近著で述べているように、WRAの政策に対する批判をきちんと打ち出している点、大量の原資料を残している点は評価されるべき[5]であろう。

第二期の特徴は、従来のWRA寄りの、あるいは戦時中アメリカ政府に協力の姿勢を示した日系二世協会（Japanese American Citizens League）よりの立場をとるもの[6]と、70年代の初頭から台頭してきたアメリカ政府やWRAの政策を厳しく批判するものとの二つの流れが並存する点である。後者の中でも、Roger Danielsのように、強制収容政策の決定過程の詳細な分析を通して「軍事的必要性」の虚偽を明らかにしたもの[7]と、Houston夫妻のように個人的な経験を通して切々と訴えるような異議申し立て的な性格をもつもの[8]と、更に「抵抗の歴史」とでも言うべき、収容所内での一部日系人の抵



Mamoru Sasaki,
Barrack 62,
Alien Internment Camp,
Santa Fe, New Mexico

The Honorable,
Juan G. de Molina,
Minister-Counselor,
In Charge of Japanese Interests,
Spanish Embassy,
Washington, D. C.

January 30, 1945.

Honorable Sir:

I have applied for repatriation to Japan in or about May, 1943 to your Consul at New Orleans, Louisiana, while I was at Rohwer Relocation Center, Rohwer, Arkansas and the similar application was forwarded to Mr. F. D. Amat, the Consul at San Francisco, California, in January, 1944 from Tulelake, Newell, California. Again, in January 1945, I signed the application for repatriation forms and presented them to the officer in charge of this Station.

However, to-date, I heard nothing about my said application and I am wondering if my name is included in the list for next repatriation vessel, which may sail within this year, according to the recent announcement by the State Department.

Will you kindly search and find out if my name is included in the list of repatriation and let me know by your return mail ?

Also, please let me know if there is my brother, [illegible] Sasaki, name in the list and if so on what number [illegible].

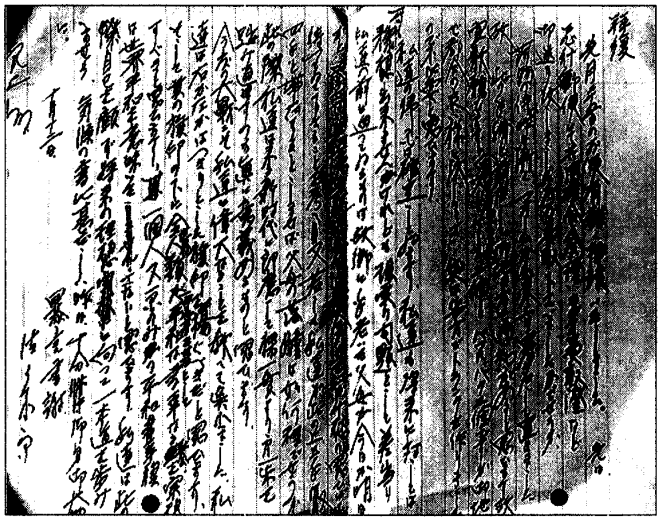
Thanking you in advance for your kind and early reply, I beg to remain

Yours very truly,

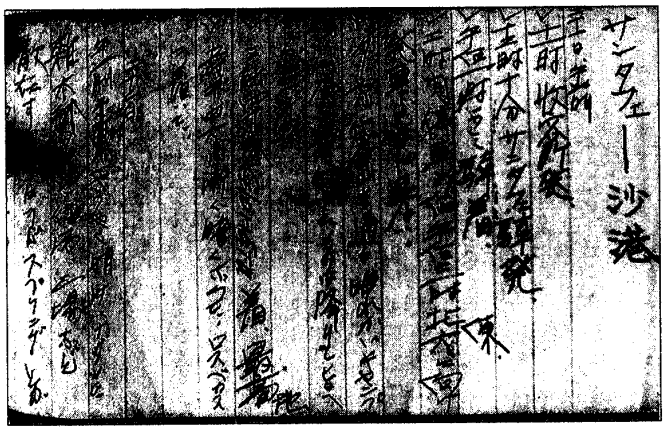
Mamoru Sasaki

Mamoru Sasaki

▲WashingtonD.C.のスペイン大使館宛“帰国”請願（1945.1.30）Campより



▲兄宛の手紙写し（1950年10月12日）「今度の大戦こそ私達に偉大なることを教えてくれました。私達は右か左かはっきりとした旗印を掲ぐべきだと思います」



▲サンタフェからシャトルまでの旅のメモ

抗運動に着目し、彼らの視点からアメリカ政府当局やWRAの政策を厳しく批判するもの[9]などが見られる。このように2つの全く逆の視点からの研究の流れがあったわけで、実際の開戦時から収容中までの様々な軋轢を背景に、互いの批判を続けてきたが、国家の謝罪と賠償を求めるという共通の目的のために、決定的な対立として表面化するには至らなかった。

第三期は、賠償要求運動の進展に呼応したものと考えられるが、86年あたりからその特徴が顕著に表れるように思われる。この時期の特徴は、次の四点にある。(1) 新資料の公開により、強制収容政策に関わった政府機関や個別の人物に関する個別研究が進展したこと。その結果として、(2) 特定の個人や政府機関、JACLに対し以前よりも強い責任論がでてきたこと[10]。(3) 第二期に続き、丹念なケーススタディの集積[11]が行われていること。これらを通して(4)それぞれのケーススタディを、個別特殊な事象として捉えるのではなく、研究の視角そのものを問い直そうとする動きがあらわれてきたことである。『アジア系アメリカ人研究のフロンティア』と題するアンソロジーの序文でNomura Gail M.が歴史や資料の解釈について挑戦的で刺激的な歴史観をうちだしている。即ち、強制収容をめ

ぐる研究史の中で、意識的なものであるか無意識的なものであるかはさだかではないが、時の政府の政策に添う形で、歴史的な「事実」の解釈が歪められたことがこのアンソロジーの中で具体的に指摘された。そうした状況を踏まえた上で、歴史家個人の仮定、憶測、先入観や過去の史観によって歪められた「歴史解釈」を修正すると共に、未だ歴史の裏面に埋れた「事実」の発掘、新しい視点からの歴史「解釈」の必要が指摘されている。

３．本歴究の意義

上記のような研究史の流れの中で、本研究の意義を押えておきたい。

本研究でとり上げたのは、強制収容政策の中で行われた「忠誠登録」でアメリカへの忠誠を拒否し、後にツーラレーキ収容所に隔離された「ノーノーボーイ」と呼ばれる人々、同収容所の中で「報国青年団」「即時帰国奉仕団」などの日本への愛国的運動を繰り広げた「トラブルメーカー」、更に自らアメリカ市民権を放棄して敗戦直後の日本への「帰国」を希望した人々である。アメリカを裏切った者とみなされて、まだまだ周囲の目は冷たく、それを反映してか研究においても従来あまり取り上げられてこなかった。彼らに関しては、管轄がWRAから陸軍へ、一度ＷＲＡに戻って司法省へと度々移動していることもあって、資料が未だ十分に発掘されていない。日本へ帰国した者は8,000名にも及ぶというのに、戦後の混乱期であったためか、厚生省の引揚援護局でも、その数さえ把握していない[13]。米国出発時の人数だけは確認できたが、性別、年齢、家族構成、などの情報は全くなく、一旦帰国した者がその後どのような道をたどったか――かなりの者が戦後アメノカに戻ったと考えられるが――など現在に至るも未だ確認できていない。

その中で、日米両国において、これら戦後「帰国」者を対象に対面面接調査を行ってきたわけだが、名簿どころか人数さえ確認できないという資料上の制約もあって全体像がなかなか押さえられなかった。結果的に手当り次第に関係者を訪ね歩き、その経験談を聞くという形の調査方法を採らざるをえなかった。先行研究もなく、関係者が高齢化していたこともあって、まずはできるだけ生きた資料を残しておくということに重点が置かれた。限られた資料の範囲ではあるが、彼らが、必ずしも従来いわれていたように、熱狂的な日本に対する愛国者であったわけではなく、寧ろ、日系人としての権利意識をもった、いわばアメリカナイズされた人々であったことなどは、これまでの論文などで報告してきた[14]。

今後は、これまでに得られた資料をどのように分析するかが課題となっている。未だ試行錯誤の最中ではあるが、本稿ではその試行錯誤の状況をそのまま留めておくことにした。具体的には、(1)ある帰国者の当時の日記の分析を通じて、ある個人がどのような状況の中で、どのような情報を得て、どのように自らの進路を選びとっていくのかという過程を明らかにする。更に(2)彼、あるいは彼が代表するある一群の人々が日系人全体の中で、どのような特殊性と普遍性をもっているのかを明らかにすること、即ち全体の「座標軸」を設定し、その中でこの人物がどのような位置にあるかを押さえておくことである。米国でも様々な形で、ライフ・ヒスト

リーの聞き取りなどが進んでいる。将来、それぞれの成果である個別のケースの座標軸上での位置関係が押さえられ、その有機的な比較が行われるならば、これらの研究が一層実り多いものになろうと考えられる。本研究がその一助になればと願っている。

4．分析の一試論

1）「座標軸」と位置の確認

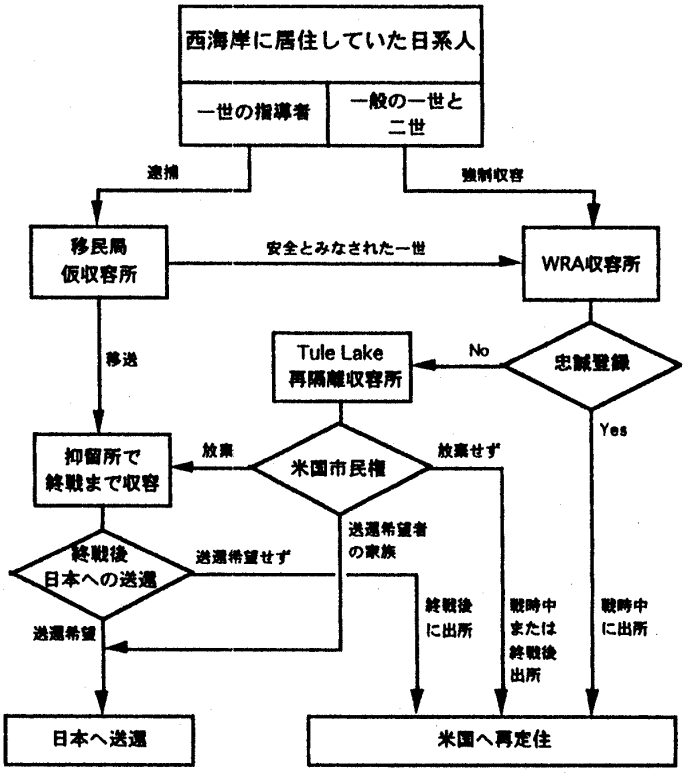
まずは、「座標軸」づくりと、本稿で扱う人物の「位置」の確認から始めたい。

図1は、日本人の強制収容に関する移動の状況を示したフロー図である。開戦時にアメリカ西海岸に居住していた日系人は12万弱である。その内、当時の日系社会の指導者と目された一世は、開戦後間もなくFBIによって逮捕拘禁される。彼らは司法省移民局の仮収容所から抑留所へと移動させられ、一部は途中で家族の元へ戻されるが、大部分は終戦まで抑留所へ留め置かれ、その後希望によりアメリカ社会に留まる者と日本へ「送還」される者に分かれることになる。一方で、一般の一世と二世は、西海岸から強制的に立ち退かされ、WRAの収容所に収容される。「忠誠登録」で「イエス」、即ちアメリカに忠誠と答えた者は、戦時中から、アメリカ軍、中西部以東の大学への進学や就職のために出所していく。「不忠誠」者はツーラレーキに戦後まで残ってアメリカ社会に留まる者、米国市民権を放棄して司法省の抑留所に送られ、日本に「帰国」する者――原則的には、翻意して米国に留まることが認められた――、その「帰国」者に同行する家族という三つのグループに分けられる。「忠誠登録」、米国市民権放棄、終戦後日本への送還の三つは、被収容者の判断によって選択が分かれる部分である。

次に、本稿で分析の対象となるＳ氏の「座標軸」上での位置の確認をしておく。

Ｓ氏は1922年カリフォルニアで生まれ、24年に家族で日本へ「帰国」、1937年15歳で、先に渡米していた兄を頼ってアメリカに戻っていた。真珠湾攻撃の報を受けたときには「やった、……さすが日本じゃ、いう感じでした」と言う、まずは、典型的な帰米二世である。サクラメント近郊のローダイで開戦を迎え、アーカンソー州ローワ収容所に送られる。「忠誠」登録を経て、ツーラレーキに再隔離、市民権を放棄してサンタフェ抑留所に移送され、ここで終戦を迎える。収容所内では、祖国研究青年団や報国青年団と

図１　日本人の強制収容に関するフロー図



いう親日（愛国）的な団体に属して活躍した。一方、所内で通信教育により電気機器取扱の技術を習得し、短波ラジオを制作して、秘密の地下室で大本営発表の戦局を傍受し、青年団の指導層に伝えるという重要な役割も果たしていた。

2）日記の分析作業について

a．史料的価値

「アメリカ国籍のアメリカ人じゃいう意識が、私の場合はほとんど無かったですね」、1988年の面接の時、Ｓ氏はきっぱりと言い切った。「確かに、アメリカで生まれたアメリカ国籍じゃから、当時アメリカへ行かれたんですがね。」再渡米したのもアメリカ人として意識からではない。義務教育が済んだら、次男、三男は兵隊に出るか軍事工場に勤めるのが当時の慣習で、それが彼にとっての渡米であった、と説明された。確かにＳ氏は、戦後決然とアメリカを捨て、その後も未練らしいものを見せなかった人々の一人である。

「もしも強制収容がなかったら」と別の質問を試みた。「多分永住するようになっとったでしょうね」と彼は一瞬の躊躇もなく答えた。「自分は日本人だったから帰国した」という確信に満ちた言葉と、「強制収容がなければアメリカに永住していた」という何気ない言葉が彼の中で矛盾なく存在することに対する不思議な思いが残った。その後、当時の日記を読み進むにつれ、ますますその思いが深くなった。そこには、若い日の彼のアイデンティティの揺れ、苦しみから自分の位置を見いだしていくまでの心の軌跡が鮮やかに表出していた。

日記は、約三年分の当用日記で、一日分の記載は数行程度であるが、1943年１月１日から1945年11月20日「出発は明午前八時に決定」と記して一時中断されるまで、ほとんど欠かすことなく書き続けられている。面接調査の折りの、「何か資料は」との問いに「そういえば帰国してから開けたことのないトランクが一つありますが」と取り出してくれたトランクの中に納められていた。トランクは手作りで、収容所の床板を用い、コンビーフの空缶を細工して補強し、表面には布を張り、防水のために蠟で目止めもされていた。日記は、その中に、書籍や、祖国研究青年団、報国青年団関係の資料、ラジオの通信教育の教材などと共に、四十年間眠っていたことになる。

Ｓ氏の日記の歴史的な価値は次の５点にある。まず、(1)「不忠誠組」の人々は、従来の歴史研究では陰の部分であり、私的な資料がほとんど公開されていないこと。しかも(2)質量ともに充実していること。(3)将来公表する意図をもって書かれたものではないこと。(4)一個人に関することばかりでなく、収容所内の団体や動向や人間関係がうかがえること。祖国研究青年団や報国青年団などは、これまで当局側の報告からのみその活動が語られることが多く、内からの視点で活動状況を示す資料が少ないこと。(5)男性の日記には珍しく、忘備録的なものに終始せず、心情が直截に語られていること。更に、この日記が(1)収容所内で起こった重要な事件――「忠誠登録」、再隔離、帰国申請、市民権放棄、抑留所への移動――を時期的にカバーしていること、(2)事実と伝聞、自身の考えなどが明確に区別されていること、(3)本人が健在で、曖昧な点の補

足説明を得たり、現在の証言との比較検討が可能である、といった技術的な利点もあった。

b．分析の視角

「アメリカ人としての意識は全くなかった」と言い切るS氏の言葉とは裏腹に、日記は「アメリカ」「日本」の間で揺れた彼の心を鮮やかに映し出していた。かつて、山崎豊子氏の『二つの祖国』を原作にしたNHKのドラマ『山河燃ゆ』のアメリカでの放映が中止されたことがある。中止の最大の理由は、当時進行中であった賠償要求運動への影響を考慮した政治的な判断によるものであったが、一方に、元々日系人に「祖国」は二つはないのだ、という本質的な批判があった。それでは日系人は実際にはこの二つの国をどのように捉えていたのか。二つの国と自分との距離を如何に認識していたのか。このような問題は、必ずしもこれまで十分に検討されてこなかったように思われる。筆者もまた、「祖国は二つはない」という本質論を、最近まで全く理解していなかったように思う。

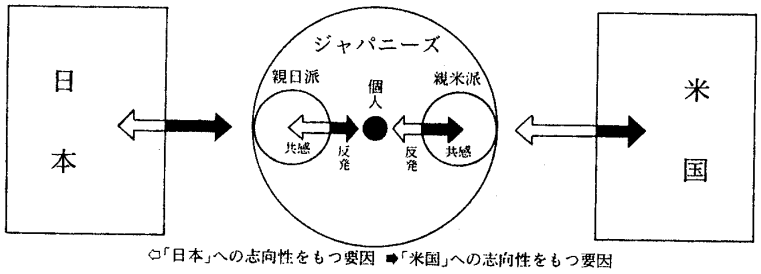
この問題はまた、視点を変えれば、日本人移民がいかに（日系）アメリカ人になるかという過程を見せてくれる。通常、この過程は、世代を経て緩やかに進行するものである。戦前は帰化権さえもたなかった一世、マージナルな存在であった二世、エスニック・ルーツを求めた三世、そして四世、五世にどの程度出自への関心が残るのか。ともかくも、緩やかな変化であろうと思われる。しかも、排斥というような外からの圧力がなければ、この変化をそれほど意識しないで通過していくものである。だが、今回対象とした「帰国」者は、戦争という特殊な状況の中で「日本人」か「アメリカ人」かを問われ、その回答を短期日の内に、いやがおうでも見つけださねばならない状況に置かれた人々であり、それ故に、その過程が特殊に鮮明に現出する事例でもある。

c．分析の枠組み

本項では、一帰米二世の日記の記述を通して、開戦直前の再渡米から終戦後の日本への「帰国」決意までの、空間的物理的「移動」と、それに伴う心の「移動」、即ち、日米の間で揺れながら徐々に定まっていく「選択」の過程を跡づける。

分析の枠組みの概念を示したのが図2である。基本的には、プッシュ＝プル仮説を用いる。まず、①個人と日本、②個人とアメリカ、更に③日系人集団の中での、個人と他者、他集団という三つの関係を規定し、それぞれの関係において日記から抽出しうる「移動」の要因を考察する。①②は、それぞれに、日本を志向させる要因と、遠ざける要因、アメリカを志向させる要因と遠ざける要因という、双方向の影響をもたらす要因に分類される。これらの外的要因によって、ある「移動」の時期や規模、方向が決定される。しかし、これらの条件が揃っていれば、すべての人間が同じように「移動」するわけではない。何らかの契機を得て、「移動」を決意する人もあればしない人もある。迷いながら選択する人もあれば、気づきさえしない人もある。彼らは、外的な要因に押されたり引かれたりするばかりでなく、主体的に「移動」していく側面を

図２



もつ。更に、複数の人間がある外的条件を共有するとき、意識的あるいは無意識的に、相互に何らかの影響を与え合う。それは、ある時は「移動」のモメントを拡大し、ある時は妨げる。それが③に分類した要因である。これらの要因を個別に、また複合的に分析することで「移動」のメカニズムの解明に迫れるのではないか。但し、「日本」への志向といった場合、例えば、ローワからツーラレーキ、更にサンタフェへの移動に積極的な場合は「プラス」と考え、何らかの躊躇が見られる場合は、「アメリカ」への志向性をもつものと考える。

Ｓ氏の日記の記述の中で「日本」と「アメリカ」のそれぞれがもつ「日本」志向性を与える要因、「アメリカ」志向を与える要因、これを増幅したり相殺したりする日系人間の相互作用のもつ要因を全て抽出し、時系列的にまとめたのが、表１～３である。それぞれの時点で、いかなる状況下で、いかなる情報を得て、いかなる判断の下に彼はこの深刻な自己のアイデンティティの葛藤をくぐり抜けていくのか。時期区分は、彼の心境の大きな変化の見られる以下の３つの期間を設定した。(1)日系部隊編成の計画発表から「忠誠登録」を経て隔離が行われるまで、(2)ツーラレーキ暴動からサンタフェ抑留所への移送まで、さらに(3)終戦から帰国まで。更に、彼の「選択」と考えられる部分を、実線で囲み表に重ねている。

３．内容分析

第一期：アメリカへの反発

「移動」の軌跡

第一期は、二世部隊の編成計画から「忠誠登録」へとつながり、アメリカに対し「不忠誠」と見なされた人々の隔離が行われる時期である。アメリカ市民たる二世を含む、日系人の強制収容は、元々、何等個人的な審査も無く、行われた。もしも、事前に「忠誠登録」が行われていたら、これほどの混乱は起きなかったものと思われる。無実の者を、無理に拘留した挙げ句の「忠誠登録」であった。結果的に、強制収容政策がとられなかったハワイから多くの志願兵が出たのに比べ、本土からの志願者が少なかったのは、当然といえば当然であった。

表１、２から、一見して見てとれるのは、志願兵の募集計画の発表から「忠誠登録」、ツーラレーキへの隔離に至るこの時期に、日本に関する記述が、戦況以外にはほとんど見られない点である。彼の「不忠誠」表明も、必ずしも日本への忠誠心に発したものではないようだ。

このような事態に対し、彼の意見は一見極めて明快に見える。

「日系市民を志願制度にて軍隊に取っても良いと云か虫の良い話だ(ママ)(1943/2/4)」。

「どうやら皆んなの覚悟も出来たらしい。

表1	日本側の要因		個人的要因と日系人相互関係が生み出す要因		米国側のもつ要因	
	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因
1943		ミッドウエーで日軍が苦戦(1/13)	日本は日本で米国は米国で特色な歴史がある(1/14)			
1	連合国は連合国で枢軸国は枢軸国で…戦勝はと我にありと云うなり(1/15) ゴールデンゲート橋が落ちたと云ふ(1/24)					
2			ローワ青年会誕生日…祖国の皆と共に歩調を進めようといふのである(2/1)		皆軍部に依って出すとか二重国籍者の市民権を取り上げてしまふとか色々やかましい(1/29) 日系市民を志願制度で軍隊に取っても良いと云か虫の良い話しだ(2/4)	
			青年会の交歓…皆小生の意見と一致…かくなくては吾々大和民族ではないのだ(2/8) ブラックの集会…どうやら皆んなの覚悟も出来たらしい、大和民族の一人としてうれしく思ふ(2/2) ようやくみんな腹も決まったらしく落着いてきた(2/10)		今丁度吾々は米政府より大テストを受けているのだ(2/7)	
		ル氏ラヂオ放送に日く今年中には東京市中をマーチして見せると。日軍ソロモン方面を引揚げたなどと伝へる(2/12)			昨日第一区と第十六区の登録…その応募者実に一名たり…喜ばしき現象だ(2/11) 明日が…志願ならびに外出登録日…或る人日吾々は今そうして家までもなくなってしまっている何の戦ふ必要ありや(2/16) 加州のゴールデン、ウエスト排日親分方では又日系の入営を禁ぜよと(2/22)	
	日本からの放送と米国の放送は丁度真反対になるのである。どちらが本当やらさっぱり分らぬ(2/19)				今頃の米国内の世論と云ふものは一方に於ては吾々をかくせしめしは米歴史の恥になると云ひ一方には彼等を厚遇するにあらずと云ふ(2/23)	
2/27	号外で強制的登録を大々的に報じた					
			意見は多種多様だ言論社会は過ぎるのだ(2/28) 今度の登録はイヘスの否とはイヘス、ノーの人はノーで良いの(2/28)		→今次大戦の真意を解して見れば吾々日本民族の彼等白人種に認められないからだドレイ的となってはならない(2/28)	
			此の際…米政府の万事に対する行ひ方はとうてい吾々日系米国市民として支援するにあたはずとなしあつさりと立派な日本人となってしまふ…一策あり(2/28)			
3			今日から日本人か米国人かの分け目の登録興味百パーセント、ランドリー会議便所会議等々(3/1)			
					米政府の日…吾々は五千や六千の日本人が兵隊になったとてならぬとてどんけやなのだだがみんな日本人将来の為だと(3/2) 今度の登録問題で頭の中はクシャクシャしている(3/3)	
			結局この登録をやる人の中にもふやふやでやる人が大いやうだ(3/3)			
				エフビーアイが来てノーと登録した人々の再検討をやる、ジヨロームでは騒ぎがあった(3/9) ヂョローム収容所では先般の殴打事件で自由でないらしい(3/19) 先般の強制登録のツラブルの無かったのは実に吾々青年会の一致したる処にあった(3/21)	今日は…狐にだまされた様な又将来を左右し得る登録の日(3/4) 米国最近の世論は今まで第一敵国はドイツであったが先般○婦人の哀訴によりてか今度は日本が頂くことになった(3/10) 又も先日の登録のことで呼び出し……(3/12) 近頃米国内全地方に渡って闇取引が盛ん…ここにも肉が一貫車来ていぬらしいがこれもそれらしい(3/16)	
			晩は朗和青年会の親睦会…諸士の熱烈なる舌ありて憂国心再起(4/10)	彼のヂヨロームの青年団体は吾々朗和のそれとは趣を異にしているらしい彼は日本行きのグループ(4/11)		
4	エイポーフール日…互に時局に似合ったデマを飛ばしている。加州に帰れるとかアラスカで日軍大行動とかと(4/1)					

表2	日本側の要因		個人的要因と日系人相互関係が生み出す要因		米国側のもつ要因	
	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因
1943		再隔離の噂				
6/7		吾々は祖国の皆さんに比べると精神的に又肉体的に劣っているであらう…(6/15)	吾々不忠誠分子の隔離がやかましく話されている。結局吾々は戦後まで何らかの方法にて現在同様の生活継続か(6/10)		(暑さ)吾々日本人でなくしては今の境遇に居てやるものはないと思った。(6/26)	
7	スペインの領事来朗…在米並に交戦国にある同胞は苦しいだらう…将来に希望を持って善処されんことを (7/6)	連合軍はシシリー島に上陸しつつあると云ふ伊国の守はかったしや？(7/11)			転住所内の就働者をヘラすと云って問題になっている (7/8)　(2/8)	今上映中のイーゴースクワドと云ふ奴は非常なものであれ位米空軍が強ければ世界中を平和にするには用意(容易)なものであろう (7/2)
			ツール湖が不忠誠分子の収容所だと云ふデマ？(7/17)		来る九月一日から十月二十日までの間に…不忠誠を分離するそうな(7/12)	WRA主マイヤー氏のラヂオ放送を聞く。彼の言はよし。(7/15)
			朗和青年会弁論大会…各弁士の熱弁はキモに銘ずるものがあった(7/18)			
			帰国願ひをすればツールレーキに行かれると云ふいのでどっとオフィスに押し寄せたらしい(7/22)	鶴嶺湖転住所では隔離問題からストに入っているとか (7/23)		
	日本にいる人々は将来にも現在にも希望に燃へていることだらう。彼等は幸福だ (7/31)		集団生活と云ふものは無闇に神経が尖がりたがるものだ(7/26)			
8		ムスソニリ伊国首相内閣総辞職以来キスカ島に米軍上陸、ビルマの独立と対英米宣戦布告、それから独ソの講和説ウソかデマか(8/1)	彼等の世の中は太平であるだろう毎晩の様に盆踊の稽古がある(8/6)		彼達は卑怯だ将来を鮮明白に話さず、唯吾々をまんまと彼等が言はんがままにしようと思っている(8/5)	
				ツールレーキに移転するのは惜しい様な気がする (8/16)	隔離に関する色んな事がどんどん発表される様になって来た(8/11)	吾々をマイヤー氏は隔離するといったが又未来でミステーキか(8/15)
	第二回交換船に乗り込む人達は萬歳の声と共に送られた(8/29)		第一世の人々が吾々に曰く軽挙盲動を慎めと(8/20)			
			東亜十億解放の為、大東亜建設の為血みどろに総武装の国民の姿を聞く度に自由立退とか再転住とか同じ同胞であり乍らも何んたる浅ましき又自己主義的言語道断たることであろうか…如何に大和民族の血流ると云へど教育と環境とは恐るべきである(8/31頃)	赤い心のツールレーキから色々とあちらの模様が知らされる(8/30)	三千年の尊い歴史を有する吾々民族が人種的に差別待遇を受けて甘んじる様ではだめだ(8/23)	
9		イタリ国は全面的に降伏したと伝へられる(9/9)		自分は今何が故に鶴湖に隔離されるのが名誉と思うのかと思っている(9/1)		
				ローワー生活も余す処二日間に切迫して来た。何んだか未練がましいものがある。(9/11)	(ツールレーキへ)機関車が、アメリカの馬鹿馬鹿と云っているやうだ(9/15)	
					五時過ぎに付いたので色々ゴッタかへして忙しい。生年月日から荷物のインスペクション何から何まで毛トウのやる事がしゃくにさわってくる(9/18)	デマか何か知らぬが又も色んな話が出始めた…主なるものは米国は今年中に講話するであらうだ(9/23)
					昼は憲兵頓所のタンクが気にかかる。夕べになれば各タオから照らす採照燈が馬鹿に神経にさわる(9/27)	朗和事報曰く、隔離はミステークが生んだ悲劇であると(9/24)
				帰国志望者はニューメキシコに送られると本当らしく巷間に…此の為の生活も深まれば深まる程何だかもったいない(10/3)		此処に来着以来一般世界から遠ざかった様な気がする (9/29)
		ツーラレーキへの再隔離				

大和民族の一人としてうれしく思ふ（2/9）」。

この時点で、既に「日本人」として生きるという方向を定めているような表現である。が、果してそうであろうか。

まず、彼が自分自身を如何に規定しているか、日記の表現に追ってみる。「我々日本人(1/29)」、「我々大和民族（2/8）」、「大和民族の一人として(2/9)」、「我々米国人(2/17)」「吾々日本民族」と「彼等白人種」を対置（2/29）、「吾々日系米国市民（3/1）」。「日本人」と「米国人」の表現の混在は、意識の面での混乱を示しているのではないか。

この段階では、未だ、彼の「選択」が必ずしも確定していないことは、次のような記述にも表れている。2月16日の集会である人が「吾々は今こうして家までもなくなってしまってゐる何の戦ふ必要ありや（2/16）」と述べ、彼はこれに賛同の意を表している。集会での発言者の意図も、断固日本側に立って戦うという強い意志表示ではなく、自分たちはこんな目にあっていながら、何故そのアメリカのために戦わねばならないのだ、という不満の表れに過ぎないように思われる。「不忠誠」と答える人がでるのは、「吾々日本民族の彼等白人種に認められないから（2/29）」であり、「民族発展の礎石となり祖国日本の為に又米国の為に尽くす一策（2/29）」と、二つの選択の可能性を認めている。迷いの日々である。

先述した通り、表1に見るように、生まれ育った日本に関する記述は、この時期ほとんど日記には表れない。あるのは、アメリカ政府への反発ばかりである。3月2日の欄に、政府が「吾々は五千や六千の日本人が兵隊になつたとてならぬとてどんけや(著者注. don't care）なのだ。」だが「みんな日本人将来の為だと」と説明したと憤慨やるかたない。「おまえらを保護するために収容したのだから、兵隊に行きたいものは行かないか、いうてきた」という柔らかな表現を用いた人もいたが、このような受け取り方の違いが、後の両者の政府に対する態度の違いへとつながっているように思われる。翌3日には「頭の中はクシャクシャしてゐる」と記し、結局は最初の「此の際あつさりと米政府の万事に対する行ひ方はとうてい吾々日系米国市民として支援するにあたはずとなしあつさりと立派な日本人となってしまふのだとの一策（3/1）」というのが彼が出した結論であった。

3月4日、彼自身も登録を終える。3月9日、12日と再審問が行われ、第一段階の「選択」が終了する。12日の審問の様子は、短い表現の中に、雰囲気をよく伝えている。「WRAのエス・ビー・アイとか中年の受付氏曰く間違いはないか？ノー、グル・ラック」意志を翻す様子のないS氏に業を煮やしたのか、WRA職員が「Good luck」と答える。言い方により「頑張れよ」の意も「そうかい、せいぜい頑張るんだね」という皮肉の意味も持ちうる表現である。

「選択」の要因

この時期、彼の「選択」に影響を与えたと思われる要因が二つある。一つは、既に日本への志向を示し始めている他の集団とわが身の比較、今一つが戦況である。

忠誠登録に関する、他の収容所の様子、特にジェロームとツーラレーキでの「忠誠」登録をめぐるWRAとの対立に対する記述は注目すべきであろう。

まず、ジェロームでの騒動の噂に対し、「吾々

朗和（ローワー）のそれとは趣を異にしてゐるらしい彼は日本行きのグループ（4.11.）」という一節が見られる。彼自身は、政府そのものに対し不満ではあるが、実際の手続きの折には騒動も起こさず協力的であったローワーの青年団体を誇りに思っているようだ。「彼は日本行き」と記す。アメリカに対する「不忠誠」を表明しながら、アメリカを去ることなど考えてもいない。ただ、この時期には、政府の政策に対する不満と、それ故に政府の指示には従えぬ、という論理により、自らの行為を正当化しているように思われる。

以前から噂されていた「不忠誠組」の隔離問題が再浮上してくるのはこうした不安定な状況の中であった。

「吾々分子のいく先はツーラレーキらしい（7/20）」

「昼からは皆んな休んだ。帰国願ひをすればツーラレーキに行かれると云ふのでどっとオフィスに押寄せたらしい（7/22）」

「忠誠登録」に際しては、一応態度をはっきりさせた彼だが、隔離に関しては不安を隠せない。

「ツーラレーキに移転するのは惜しい様な気がする（8/18）」

「自分は今何が故に鶴湖に隔離されるのが名誉と思うのかと思っている（9/1）」

「ローワー生活も余す処二日間に切迫して来た。何んだか未練がましいものがある（9/11）」

と、気弱な表現が続く。結局は、

「三千年の尊い歴史を有する吾々民族が人種的に差別待遇を受けて甘んじる様ではだめだ（8/23）」

間違っているのは、人種差別をしているアメリカなのだから、気弱になってはいけないと自分を励ます。

隔離されるのが、「忠誠登録」の時にもめたツーラレーキであることにも彼のためらいの一因があるようだ。ツーラレーキでは、忠誠登録の折、WRAの不手際もあって、大きな騒動がおこっていた。結果的に登録を拒否した者も多かった。彼はこれを「赤い心の集合所（8/30）」と評している。政府にたてつく者、という意味か。9月14日、彼らはツーラレーキへと移送される。

「機関車が、アメリカの馬鹿馬鹿と云ってゐるやうだ（9/15）」。

アメリカ政府への不満は、未ださほど厳しいものではなく、むしろすねるような、甘えるような調子が感じられる。

戦況についての詳細を論じることはしないが、ここで参考程度に考察を加えておく。彼の役割から考えて当然のことではあるが、戦況は、常に最大の関心事である。大本営発表のニュースは床下で傍受し、アメリカ国内の新聞、雑誌は自由に購読することができた。収容所内での情報の混乱、デマの伝播の状況が浮かびあがる。

「東条首相の米本土爆撃行がやうやく便所会議に現はれ（4/19）」「米陸軍省は先年四月十八日東京爆撃行を今頃になって発表（4/27）」「日本政府は米大陸侵略軍の準備も終った（5/3）」「米空軍が北海道を爆撃したなどと又デマ（5/11）」「東京からの放送は曰吾々は一大攻撃の準備全く成れり（5/12）」「アツー（原文通り）に米軍が上陸（5/14）」「憂慮されたアツーも今朝の放送で安堵（5/18）」「今朝のラヂオは二千の守備兵にて十八日間二万の敵を相手にもちこたえてゐたアツー島の最後の日が報ぜられた（5/30）」「朝の東京放送はのがしてならぬ日課の一つ……アツー島は落つ(6/1)」「米側ではアツーは交戦中であると発表（6/2）」「日本は既占領地帯の整理にひたすら邁進（7/14）」

相反する情報に、収容所内の苛立ちも募っていった。7月19日には口論から殴打事件があった。

日記には、連日、戦況に関する叙述が続く。彼が後に日本の勝利を信じて帰国したという証言を考えるとき、興味深いのは、敗戦までの彼の戦況の分析が、極めて冷静なことである。アメリカ側の情報と日本側の情報、常に冷静に見極めて、正しい情報を得ようとする彼の姿勢がうかがえる。だが、これと比較すると、一旦敗戦を認めた後の彼が、デマに悩まされつづけるところは、当時の状況を知らない筆者などにとっては、不思議なほどである。希望的観測と失望を繰り返した後の、誰よりも多くの情報を抱えていた筈の彼にしてこの混乱である。「デマ宣言の威力を初めて味はされつつある（1945年8月24日）」と日記には記されている。

第一期は、「忠誠登録」からツールレーキへの隔離の時期である。天候や日々の単調な生活の記述から一転して、米軍への志願のための登録、更に未成年を除く全日系人に対する「忠誠登録」をめぐる、騒然とした空気が伝わって来る。

公的にはアメリカへの「不忠誠」を表明しながらも、それが直接「日本」への志向につながらない。むしろ「アメリカ」政府への不満だけが綴られる時期である。アメリカ市民としては、日系人に対する政府の政策を支援できない。これは政府の「ミステーク」だ。民主主義の国アメリカがこんなことをするはずがない。不満の裏には、強い期待、すがるような思いが隠されているように思われる。

微妙に揺らいではいるが、「日本」への帰国など全く念頭にない。氏の属する朗和の青年団も、既に「帰国」を表明しているジェロームの青年団とは一線を画しているようである。ツーラレーキでの「忠誠登録」の際の、WRAに対する反抗的な態度にも批判的である。政府の政策に対しては不満を抱えているが、反抗するつもりはない。自分達の協力で、支障なく登録を終えたことに満足感を示している。それ故、これらの反抗的な集団と一緒に隔離されるとの報に接し、狼狽している様子が看取できる。

第二期：「日本」への傾斜

「移動」の軌跡

第二期（表３参照）は、ツーラレーキへの隔離から帰国申請、市民権放棄へと、日本「帰国」が具体化し、現実のものとして見えて来る時期である。最大の混乱と迷いの時期である。表３が示すように第一期よりもはるかに具体的に、しかも度々「日本」が見えてくる時期である。一方で、アメリカが次々打ち出す政策への激しい反応と、これに対し積極的に反骨精神を発揮する仲間の「現状維持派」との関係、逆に、収容所内で立場を異にする人々、即ち、アメリカに協力的な人々への反感と軋轢とが彼の最大の関心事となり、又、彼の「選択」に最も大きな影響を与えるようになったと想像される。

ツーラレーキへの隔離は「日本」への移動の第一歩であったが、彼にとっては、望まない「移動」であり、最初から波乱を含んでいた。日記には到着後の手続きについて「何から何まで毛トウのやる事がしゃく(9/18)」と書かれている。「捕虜囚人のように」写真撮影や指紋押捺も行われた。また、これまでの収容所とは比べものにならないくらい厳重な警戒体制に、「昼は憲兵頓所のタンクが気にかかる。夕べになれば各タオ（筆者注：tower）から照らす採照燈が馬鹿に神経にさわる（9/27)」と記す。苛立ちの日が続く。それでも日本への「帰国」希望者が再びニューメキシコへ移送されるという噂を聞いて「此の為の生活も深まれば深まる程何だかもつたない（10/3)」と記す。動揺は隠せない。

そもそも、ツーラレーキは「不忠誠」組のための隔離の収容所であるはずだった。だが、そこには、必ずしも不忠誠といえない大勢の人々がいた。カリフォルニアに残してきた財産を失いたくないという理由で居残った「忠誠」組もいたし、その家族もいた。新来の被隔離者にとっては、住居や、職に関しても、これらの先住者が優先されているという不満があった。彼らが、当局との対立を深めれば深めるほど、これら「忠誠」組との対立もまた深まって行った。まさに、収容所内は一触即発の危機を迎えていた。

いろんなグループがあってね。親米的なグループのニュース、キャッチしたらすぐ殴り込み、説得に日夜奔走しよったような感じはしますが。結局、日本へ帰って、日本人であるという声明した人の集まりの中の一人ですけんね。私は、だから、そのグループが不利になること、いわゆる日本人として不利なことは容赦なしに淘汰しよりましたね。別に人殺しをしたとか、そういうことじゃなくて。精神的に一本槍で進もういうことを、何十人か何百人かで申し合わせしておりました。

確かに、そういうグループもおいでになったらしいですね。行政へいろんなことを密告する役の人が。事務所、あれ何とか言いよったかね、窓があるんですよね、収容所に。その窓口の事務されとる人が、その人とは日本人社会と全然カウンターを隔てて別のところでしたから。……何かの用で行政府へ行って、用を足す間に、「イヌのようなものはいらせんので（いらないんだよ)。死んでしまえ」いうようなことを言うて、帰ってきよりましたよ。そりゃもう、全然、生活意識がちがうんでしょうね。[15)]

10月７日、WRAが43名のcoal workersを解雇したことから始まった労働争議は、トラック横転事故をきっかけに、大規模な農場労働者のストへとつながった。翌週、代表者会は忠誠残留組を他の収容所へ移送するという要求を突きつけた。食糧倉庫からの食糧横流し事件が、火に油を注ぐことになる。11月１日、マイヤー局長がツーラレーキを訪問すると知り、この機に話合いをもちたいと要請する。同じ頃、別のグループが病院の医者を襲撃する事件が発生する。11月４日、食糧問題をきっかけに、「暴動」が勃発する。戒厳令が敷かれ、「暴動」の首謀者と見られた人々は「スタッケード」に隔離される。日記はこの状況を

「農園就働者達は昼まで通行権問題でMPと問題を起こし、昼からは或るトラックが転覆して怪我人も三十人（10.15.）」「昼食後は行政部前にて示威運動で一万余の大群衆押し出す（11.１.）」「昨夜又も当所内日・白人間に問題が起った。今朝は……戒厳令がしかれ催涙弾投ず（11.５.）」「当所内にタンク機関銃を持込んだことはやうやく国際問題と成ったらしい（11.11.）」「吾等の代表委員は次から次にと連れ去られる。今晩七時から六時まで禁足令……何の為か知らせない（11.13.）」

と記録する。緊迫した空気と、彼の心の高揚が行間ににじむ。

事件は日本政府の知るところとなり、日本の利益代表国である在米スペイン領事が11月９日、ツーラレーキを訪れている。これもまた、当局との間の火だねになったという。

スペインの領事か赤十字の代表か何かが、キャンプにおいでになるというときには、何千人いう人が、自由運動って言うてええか、我々が（するのです。）それが当局の目にさわったということ。日本人集団いうたらどういうことやるやらわからんで、いうことで、解散命令が出る、従わんいうようなことで、ああいう事件、どんどんどんどんエスカレートしていったんでしょうね。……多分、ブラックリストができてたんでしょうね。……最高危険分子でサンタフェ送り、いうのが、私としては名誉なことだったんですが。[16)]

ともかくも、1943年は混乱のおさまらぬまま暮れていった。S氏の心も大きく揺れている。「然し何事も考へる必要はないはずだ。吾々は日本人だから（12/24）」という記述には、逆に思い悩む彼の姿が浮かぶ。「吾々は日本人だから」と自らに言い聞かせているように思われる。アメリカ政府に対する諦感が、精神的な「日本」への接近につながり始めたのはこの頃か。それでも年末には、「今は国賊として当鶴嶺湖隔離所に伸吟する身（12/31）」と記す。アメリカに対する国賊となってしまった身を嘆いていると解釈せざるを得ない一文である。

開けて翌44年１月は帰国申請、市民権放棄の噂から始まる。

「自分等は自由の米国で云はば六ケ年間も我儘な事ばかりやつてゐる。祖国に帰つたら一時はつらい事だらう（2/25）」

表3	日本側の要因		個人的要因と日系人相互関係が生み出す要因		米国側のもつ要因	
	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因
1943/10	日本も来るべき日米大決戦に俱へその対策に大童だそうだ。…うかうかしてはいれない(10/26)		昼食後は行政部前にて示威運動で一万余の大群衆押し出す(10/31)	帰米グループの横行が説へられる。血気にはやる若いものの無思慮なる行動 (10/27)	農園就働者達は昼まで通行権問題でＭＰと問題を起し、昼からは或るツラックが転覆して怪我人も三十人を数へたそうだ。(10/15)	
11	明治節…厳かに式は挙行…感激の此の日…永久に忘れる事は出来ない日章旗と朝霧(11/3)					
	ツールレーキ暴動へ					
	スペイン領事が日本政府の依頼を受け、当所を訪問日本放送は当所の事件に関しタンクや実弾でオドかしていると。		当区の青年会組織に付いて有志家は色々と奔走していられる。(11/11)		正義は勝つと云はれるが正にそうだ今次の同胞側の追求に彼等ぐの根もでない。桑港スペイン領事来る。 (11/4) 昨夜又も当所内日・白人間に問題…今朝は高校前道路を境ひに戒厳令がしかれ催涙弾投ず(11/5) コールが無い。トイレットペパーがない。(11/8) 当所内にタンク機関銃を持込んだことはやうやく国際問題と成ったらしい。 (11/11) 吾等の代表委員は次から次にと運れ去られる。今晩七時から六時までは禁足令。何の為か知らせない (11/13) 日本語学校の先生が連れ去られる。スペイン領事を呼ぶも軍部が電報を打たせない。交渉は一時座礁の形にある。食糧は悪くなる一方だ。ビンズとブレッド。 (11/15) 二十四時間を通して軍が所内を警戒している。御無理御尤である。(11/17) 軍部がやうやく緩和に出た如く見える…(11/23)	
	戦争は明年の三月で終了するハワイ諸島に於て真珠湾攻撃以上の大襲撃ありたりと色んなデマである(11/18) 南太平洋ブガンビルの大海戦は米国は全然否定…一隻も損害を蒙っていないと…一方日本は三十万と四千隻やっていると。(11/19)					
12	日本政府より吾々在米日本人の慰問金が来たと云ふ話がある。事実とせば如何にして…御礼をすれば良いのだ(12/10) 何事も考へる必要はないはずだ。吾々は日本人だから (12/24)		吾々の絶対的に支持していた交渉委員も軍部の能により認められず吾々は又も右か左か決めねばならぬ現状維持だ(12/5) 或る青年達が前交渉委員をこはしてしまをうとしていると云ふ。デマであってほしい。(12/29)	所民はやうやく日本人の短所を出し始めた。即ち熱し易く冷えやすい。(12/7)	今年のクリスマスはクリスマスではなくてクルシマスであると云った。…然しこれが自由の国米国のやり方だ。(12/23)	マイヤー氏声明して曰く、どうかデーマを飛ばしてくれるなデマで在日米人も危機に陥ると。(12/4) 一昨年初秋遠いアーカンソに送られ煩悶の日は続き今は国賊として当鶴嶺湖隔離所に伸吟する身とある (12/31)
1944/1/7	ハンガーストライキ					
	帰国申請が又行われている話も色々あるが目的は交換交渉促進にあると云ふ。 (1/10)		各職業部主任達は軍部の力を借りて吾々の正式代表者はのけもとのして私欲に走らんとした。然し正義は最後の勝利者である。…投票があった現状維持106 現状打破38(1/11) どん天が毎日続いている丁度当鶴嶺湖の現状の様である。何時破裂するか知れない状態である。降るものが雨と血の違があるだけだ (1/16) 不徳行為者に釣られて仕事を開始したらしい、日本人で日本人を売る行為…言語同断…吾々の永久の敵である(1/17) 現状維持＝現状打破との対立は将来に於ける悲惨事の根源…やうやく分離説が盛んとなった(1/22) 他の人々は現在の問題が何と見何と考へているか知らん成行きにまかしている様子が度々うかがはれる (1/23) 現状維持を主張し乍らも仕事に復帰する。人心と伝ふものはわからぬものだ(2/3) 各転住所では日系の徴兵法復活によりて非常に心配しているそうだ(2/7) 昨年の日記に依れば今頃は強制登録で頭を痛ましたが今年は徴兵再制で苦頭をなやましているのだ(2/8)		帰国申請が又…交換交渉促進…一方日本人を徹底的に区別するとも云ふ(1/10)	
2	グリブスホルムで帰米したクラード、エー、バス（ヒリッピン行政部副官）氏はライフ紙上に発表…日本の国防は堅陣の一路をたどりつつある。吾々は戦線と同様銃後を守れば最後の勝利は必然吾々のものだ(1/27) 日本軍は最近前線にてどしどし新武器を使用し始めたと米国ではおどろいている (2/13)	病院船ブエノスアイレス号及び当鶴嶺湖問題が解決されぬまでは日米両国間に交換船は無いと(2/17)		うっとりしている（日当の良いところで）自分の現在の悲境は忘れる様だ (2/6)	四千名余の米国に非反誼的態度を取る日系人の市民権を取り上げると云ふ事がやかましくなった。部門責任者もだまり込んでしまった (1/29) バタン半島捕虜収容所のデマ宣伝をドンドンやってその結末は第四回公債の売出し開始と来るから意識ある人が見れば事実の程は判る (2/11)	ツールレーキの不忠誠を中部地方にうつせと云ひ出した。又実行するかも知れん。 (2/2)

3	我々は唯日本海軍の落管いている処に期待がある (2/18) 在米日本人の取りつつある手段に帝国政府は非常に不満を抱いているらしい(3/5) 依然として戦々キョウキョウの日…これは日本人の当然受くべき天与の任務又来る日の約束である(3/11)	米軍はマーシャル群島を突破トラック諸島に向け空爆を開始したと放送(2/18) 自分等は自由の米国で云はば六ヶ年間も我儘な事ばかりやっている。祖国に帰ったら一時はつらい事だろう (2/25)		グラナダ及びミネドカ方のキャンプでは少数ではあるが徴兵を拒絶したそうである今更彼等も云々は云へぬものだが然し強制立退を命ぜられしを思へば彼等にも一考あり(3/2) 四十年も五十年も祖国の地を踏まぬものは日本に対する憧憬のうすいのも無理からぬ事…自分でさえ時折ああそうだったと云ふ(3/10)		
4	近い中に第三回交換船が出ると噂がある(3/11)(4/2) ライフ紙上に今更の如くアツ島日軍守備隊の最後と題して数十名の皇軍が各々手リュウ弾を胸部にて爆発させ自刃している写真が出ている(4/7)		或る人…在米の日本人は祖国の同胞が食ふか食はれるかの戦を続けている現状を真に識った人は殆どいないだらうと(4/3)	日本語新聞は…日系の徴兵問題で一ぱい…此の問題も結局こうすればあちらに悪くああすればこちらに悪しのヂレンマである(3/15) 一昨年の夏自分は日米戦の為西部沿岸は危険地帯として奥地に移動し戦後まで待つものだと思っていたのだ(4/9)		
5	感激あふる天長節祝賀式が挙行(4/29) 日本人であると云ふ象徴の為には可愛いい頭もイガグリである、六年前の日本人に立ち返りだ精神の持方も違って来る (5/2)		他転住所同様に多種異分子が介在していては果して当所が隔離所なるか否か判断に苦しむ、と(4/11) 祖国研究会第二回集会…目的とする処は第一吾々の資格問題第二教育問題其の他は色々と交換船(5/31)			米国内に平和運動の声が濃厚であると聞く(4/12)
6	サイパン島に上陸をこころみた米軍は大損害(6/15)	米空軍は支那基地より北九州方面を空襲(6/16) サイパン方面に上陸を試みた米軍と日本守備隊の間に激しい戦闘が展開されている(6/20)	第十三区ではバザ大会を今夜催ほしている時局からどうかと思ふ在米四十年にもならばいくらか頭の辺も違って来るのも無理はない事だらう(6/17)		米政府のやる事の様に朝は日本晴の日和が昼からはかき曇って豪雨…(6/24)	
7		電光石火と云ふ言葉…サイパン島占領さる(7/18) セイアン島に米軍が上陸…取越苦労だらうか。最近の太平洋戦は受身勝(7/26)	夜になると盆踊の稽古演芸会カニボールと日本人もこれでは駄目である。(6/25) 我が同胞十四名の断食は十一日目…所民運署にてベスト所長に釈放を迫る(7/29)		待望の市民権返上も何だか色々とうはさされている。…最後の決はどうしても華府方面にあるらしい(7/19)	
8	父母に万国赤十字社を通じて書面を出しておいた (8/5) 祖国研究青年団主催必勝祈願式並に大詔奉戴記念講演大会…初めて…日本人らしき行動を取る事が出来得る様になった(9/8) 神風特別攻撃隊…聞く度に何か知ら吾々の祖国がある尊い神の様な気がして来る (11/22)	北九州、西中国方面に又も敵米機が六十機も飛んだらしい決戦の機近き(8/20)	我々には日本に帰ると云ふ大きな希望があるが一体他転住所の人々は如何なる希望ありや(7/31) 米国に不忠なる者は日本に忠でなくてはならぬ筈だが隔離され又転住する人もあるらしい(8/7) 祖国研究青年団もいよいよ発団式を挙行(8/12) 大勝利萬々年…スタッケード内の全員は帰宅(8/24)		米国市民権放棄の用紙が華府より来たので早速出した一週間前(11/10)	食料も近頃は悪い方ではない。ベスト所長も民権よう護協会に頭を下げたらしい (8/27) 市民権も捨てることが出来る様になったが何んだかその場になれば皆さわがない…又も忠誠不忠誠の如く後から気のつく奴等があるんだろう(12/4)
12/7	市民権放棄					
			市民権放棄も大分実現しつつある。…約百名の人が聴聞会に出頭を命ぜられているだらう。彼等のやり方がどうも平をんでない(12/13)		市民権放棄を巡って我々報国青年団を色々と当局では見ている…覚悟は必要 (12/15)	不詳事件とはいえ…小我を捨てて大義に生きんと務めた自分は…この事件により…動揺を禁じ得ない (12/18)
12/27	サンタフェへ					

「日本」への帰国が現実性を帯びてきた時、日本の生活に対する不安感がのぞく。六年間住み慣れた「自由の米国」と不自由な「祖国」という対比の中でのぞく不安である。これはまた、この時点で態度を決めかねている、あるいは「日本」を向いていない人々への共感にもつながる。

「四十年も五十年も祖国の地を踏まぬものは日本に対する憧憬のうすいのも無理からぬ事だ。自分でさえ時折ああそうだったと思ふ（3/10）」

この記述は、「日本」への帰国を躊躇している自分に気づいて驚きと、無理もないよ、と自ら慰める響きをももつ。

ところが、年末の市民権放棄実現の頃には、既に彼に躊躇する様子はない。

「米国市民権放棄の用紙が華府より来たので早速出した。約一週間前（11/10）」

「吾々が朝早く体操を元気良くやるのでニューギニー方面から帰還したMPがくやしがってゐるらしい。吾々も大分日本人であると云ふ自覚に甦った（11/15）」

「来たぞ来たぞ待望の市民権放棄が。午後一時頃より夕方まで聴聞会に出頭した。残るは近日中に華府から着く用紙に署名すればよいのだ（12/7）」

「市民権放棄も大分実現しつつある。現在までに約百名の人が聴聞会に出頭を命ぜられてゐるだらう（12/13）」

一般には、まだためらっている人が多いらしく、「市民権も捨てることが出来るようになったが、何んだかその場になれば皆さわがない様な風である（12/4）」と観察している。だが、彼自身はもう迷わない。

「選択」の要因

先述した通り、この時期に、彼の思考の中で大きな部分を占めているのが、同じくツーラレーキに収容されている他の日系人との関係である。政府当局との対立姿勢をあくまで堅持しようとする現状維持派と、和解を求める現状打破派。前者の代表者の拘束といった形の、当局からの圧力が強化される中で、対立はますます激しいものとなり、その反発として「日本」へ傾斜していったのではないかと想われる。

「或る青年達が前交渉委員をこはしてしまをうとしていると云ふデマであってほしい（12/29）」

「どん天……丁度当鶴嶺湖の現状の様……何時破裂するか知れない状態……降るものが雨と血の違があるだけ（1945/1/☆）

「不徳行為者に釣られて仕事を開始したらしい。日本人で日本人を売る行為だ（1/☆）」

「何と軍の手先となつて吾々に汚名をぬらんとしている彼等は第二交渉委員として登場しようとしているらしい（1/☆）」

迷っていた彼が、これほどはっきりと市民権放棄の決意をした理由の一つは、この時期、度々記載されている、日系兵士徴兵制の問題のように思われる。先の「忠誠登録」の折、アメリカ

への「忠誠」を誓った人々は、新たに復活した徴兵制の問題に直面することとなった。「不忠誠」の彼は、この徴兵制の対象とはならない。が、自分とは全く逆の選択をしていった人々の行く末を真剣に見つめる目が感じられる。彼にとっては、「忠誠登録」における彼の判断の正しさを立証してくれる材料であったのかも知れない。

「グラナダ及びミネドカ方のキャンプでは少数ではあるが徴兵を拒絶したそうである今更彼等も云々は云へぬもだが然し強制立退を命ぜられしを思へば彼等にも一考あり（3/2）」

「我々には日本に帰ると云ふ大きな希望があるが、一体他転住所の人々は如何なる希望ありや（7/31）」

この頃から、急速に日本への「帰国」に傾斜していったように思われる。そして、先述した市民権放棄。彼は、迷う人々を後目に、さっそうと申謂を済ませる。

1944年も暮れの押し迫った12月27日午前３時半、突然拘引されたS氏ら69名は、一旦旧スタケードに拘引された後、可法省管轄のサンタフェ抑留所に移送される。「今日あるは覚悟の前」と記しているが、その夜、彼らは拘留されたスタケードの中で、夜通し、大騒ぎをしたという。

今も忘れんですよ。軍歌歌うて、バケツの尻たたいて、音楽いうてええか、楽器の代わりいうてね、夜が明けるまで大騒動したのを覚えておりますよ。……もう行くところまで行くんじゃ、いう感じでしたから。恐ろしいこともなかったし。[17)]

Ｓ氏ら69名の護送にカナダ国境警備兵が約30名、物々しい警備であった。

第二期は、ツーラレーキからサンタフェへ、市民権放棄を経て日本へ大きく一歩を踏み出した時期である。それでも、「日本」に関する記述は、未だ量的にも多くないし、具体的なものにもなっていない。

この時期の彼の関心は、専ら他の被収容者との関係にあるようである。WRAや親米的なグループに対する批判と、行動を共にする祖国研究青年団や報国青年団内部での集団意識と葛藤。暴動、戒厳令、ハンガーストライキ、現状維持派と現状打破派の対立。当時未だ若かった氏は、必ずしもこのような運動の中心にいたわけではなく、むしろ、理由も分からず右往左往している様子が、緊迫した調子で語られる。先の見えない混乱の中で、追いつめられて、あるべき姿を追い求める日系人たちの様子が痛々しい。

彼の心は揺れ続ける。群衆心理で過激な反応は示しているが、未だ日本への「帰国」に対する不安、「自由の米国」への未練も垣間みられる。「日本」への「帰国」が具体的な形で見えて来るのは、市民権放棄が具体化する44年末の時点である。

44年11月から12月にかけて、彼はさっそうと市民権放棄の手続きを行う。あたかも自分の迷いに決着をつけようとしているように見受けられる。

第三期：サンタフェ、敗戦、帰国

「移動」の軌跡

第三期は、サンタフェへの移送から、日本の敗戦の報、広島への原爆投下の報に接し、最終的に「帰国」の意志の確認をする時期である。

この時期には、表４でもわかるように、「アメリカ」のもつ要因は、日記の中にほとんど表れてこなくなった。一方で「日本」の姿はますます鮮明で、抽象的なイメージではなく、交換船実施の噂（6/30）（7/11）（7/14）、日本在住の父母の消息（5/10）（6/20）（9/2）（9/25）と具体的なイメージが描かれているのが、特徴である。

だが、「講和提案の実否等、見るものは交換船の夢ばかり。おお祖国、祖国、祖国(7/14)」「早く日本に帰りたい……父母も首を長くして待って下さっていることであらう（9/2)」といったはやる気持ちの一方で、なお、「信じてはいるものの、ここが人間のつまらぬ処か(9/25)」「帰国帰還等色々噂があったが、此の様子では此の処二三カ月は大丈夫らしい（10/10)」「ともすると自分等の生活はこれが普通であるくらい思はれるやうな気もする時がある。沙婆のことも忘れてしまったやうな気がする（11/5)」のような迷いを最後までのぞかせる。

「選択」の要因

この時期、彼の「選択」に最も重要な影響を与えたと思われるのが、当局との対立、敗戦の報である。「日本」への傾斜を追ってみる。

サンタフェは、敵性外国人のための抑留所である。ここでは、終戦から帰国に至る１年弱を過ごすこととなる。「日本」への最終段階であり、ツーラレーキほど激しいものではないようだが、それでも当局や、日系人の中で立場を異にする人々との軋轢は続く。1945年２月６日の日記に、彼は、収容所の中に３つのグループがあると記す。彼ら帰国請願者と、ハワイ帰還請願者、あとは「うやむやや、即ち半ば米国忠誠者」である。

サンタフェの先住者である、ハワイ出身者について「勝手のいい解釈ばかりしてゐる。即ちウソも方便（２.12.)」「ハワイ組の子息を米兵に出してゐる連中がパロール（筆者注：parole 仮出獄）になるとか……実際情けない奴等だ。死んでしまった方がマシ（５.24)」などの批判が散見される。ハワイでは、西海岸で見られるような、集団強制収容は行われなかった。そのことから、ハワイでは、本土とは違い、非常に多くの志願兵をだすことになった。彼らの活躍が伝えられるにつれ、収容されている家族は喜び、それを見ている「不忠実」組はいまいましく思ったのであろう。

一方、彼らに対する当局からの圧力は、ますます強くなっていく。この当時、市民権放棄者、帰国申請者の急増を、当局はこれら収容所内の圧力団体の恐喝によるものと考えていた。これらの団体指導者をツーラレーキから取り除いた時点で、当局の姿勢は決まっていたのである。

３月12日、橘、津波の両指導者が突如拘引され、他の収容所に移送されることになった。見送りに集まった人々に、当局が解散を命じたことから、騒動は起こった。

彼等は非道にも催涙弾を約十個ばかり投げた。運良くも此の折東よりくる微風はかへっ

て官憲側に全ガスを運んで行った。彼等の遁げさまよふ様はオカシクて耐まらずどっと一度に笑い声が日本人側から起った。ギヤスの引いたのち彼等は更に多量の催涙弾や棍棒などをもつて棚内に走って入った。共同組合前の広場まで降つた時大杉エデー君は一官憲によって帰宅中を後方より頭部めがけて殴打された。……

当局は、サンタフェの中に更に二重に棚を設けることで、彼らを隔離した（3/14）。新聞、雑誌の類も取り上げられた（3/15）。「当局では我々の間に自爆隊なる一団体があると云ふ　全く狂気の沙汰に外ならない（3/19）」所長に対する「脅迫状」を書いたものがいる、被隔離者の中に超過激分子が含まれている、との判断からの官憲からの圧力である。3月30日、突然所長の態度が軟化し、翌日350名全員が解放される。だが、氏にとっては、何故このような事件が起きたのか、何故終息したのか、全くわからないままである。

「自分は何故に先般の不祥事が起こったか又我々三百五十余名が二重棚の中に入り込んで来たか、何事も眼前に起こったことながらさっぱり判らない（3/16）」

おそらく、当時サンタフェにいた大半の人々は全く事情の判らないままに事態は進展し、否応なく巻き込まれていったものと想像される。本報告では紹介しなかったが、当時のサンタフェにも、何人かの指導者と目される人々と、彼らを取り巻くグループがあった。互いに反目するものもあれば、未だ関係のつかめないグループもある。その数人の方に面接を行ったが、必ずしも話のつじつまが合うわけではない。誰かが真実を隠しているのかも知れない。忘れてしまったのかもしれない。正に「藪の中」的な状況を呈している共通の場にいても。それぞれに自分の論理で切っていくと、これほどに相反する結論に達するものか。当時、誰一人として、収容所内で起こっていることを完全に把握していたものはいなかったのかも知れない。

彼らにとって、ただ一つ確かなことは、「日本」が一歩一歩近づいていることだけであった。戦況は風雲急を告げていた。

「ルソン島に米一ケ師団上陸の噂……又一方これの方面米艦隊大負ともある（1945/1/9）」「呂宗島……に約六萬の米軍が上陸したのは事実らしい。此の島こそ日米否今次世界大戦争の勝負場たるを思ふ時、思はずこぶしをにぎる（1/10）」「一千五百機の米空軍が本日東京一帯を襲ったらしい（2/16）」「東京空爆に次いでユオウ島に米軍が二度も上陸を企て其の都度撤退させられた（2/17）」「米軍は硫黄島に上陸したらしい。……いよいよ戦局は緊迫しつつある。祈皇軍必勝（2/19）」「沖縄島に上陸開始（4/1）」「昨夜独逸……無条件降伏（5/7）」「沖縄もとうとう敵手に陥った（6/19）」

広島への原爆投下、敗戦。短波ラヂオで大本営のニュースを傍受するという役割は、サンタフェでも継続されていた。できるだけ冷静に戦局を判断しようとする意志の表れか、氏の戦局

7	日米交換船にも一縷の望みがあるらしい。神かけて祈る。一時も速に帰国祖国の保安東亜建設に埋進したい。(7/11) 講話提案の実否等、見るものは交換船の夢ばかり。おお祖国、祖国、祖国 (7/14)	日本の聖土爆撃に爆撃が続く…呉市にも来る。然し広島市には未だ一度も(7/6) 沖縄島も大半敵手に陥った此のアダは…本土に於て近い中に…取ってかへすのだ (7/26) 交換船も条件が良くないとかで日本側が受付けぬらしい(7/31)	日系米兵士が太平洋戦で盛んに活動している。当所内でも盛んに気炎を上げると思へは日系兵を忌子に持つ親だった我々も祖国に対し申訳ない。(7/9) ハワイ帰が三十何名もあるらしく皆馬鹿騒ぎをしている。国家観念も何もない。実際可愛相な奴等である。 (7/16)		敵性外国人の送還権を大統領に付与した(7/24)	
8		日米戦も此処二ヶ月の間に終了と云っている長くとも半年とか(米国側で)(8/2) ロシアは対日宣戦布告…青天の霹靂(8/9)			コシャクにも我が郷土広島に新爆弾。アタミック、バムを投下した。科学の粋を集めた新武器だと鐘やたいこではやしている。(8/6)	
	敗　戦					
	真相をつかむことの出来得ないのは残念…あくまで我が祖国を信頼している。急転直下のうらには何ものかあるを信ずる(8/14) 或る面よりの報により我々も確実に知るを得た。今后は吾等としても全世界人類と共々に新社会建設の為身命をとして勇往邁進せねばならない。(8/17)	日本政府は各聯国に対しポツム声明なるものを受け入れる用意ありと報ず(8/10) サンタフェ方面より盛んにさわぎ声…吾々は驚愕す。米側報道のみでは真実はつかめない(8/13) ニュースはブラックである。デマは飛び放題である。デマ宣伝の偉力を初めて味はされつつある祖国に今帰るなと云ふ。馬鹿にも程がある。日本人の日本に帰るのである。(8/24)	クスキヤよりの来所者はフォートスタントンへ仕事に約四十名今朝出掛けた。実に忠誠改まれりである (8/29)		広島の原子弾は一万余名の生命と十万の負傷者を出したと米は報じているいずれにしてもニクイ奴である。毒ガス以上のものを平気で使用する米国だ(8/21)	
9	早く日本に帰りたい。…父母も首を長くして待って下さっていることであらう。(9/2)					
	覚悟は極めて見たもののどうしても信ぢられない。否信ずることはとうてい出来得ない(9/4) 裸一貫で一時も早く女子供全部帰って来いとか（丸山鶴吉氏）(9/16) 早く真実を見たいものである。信じてはいるものの、ここが人間のつまらぬ処か父母も、今日か明日かと待っているであらう(9/25)		此の新転回期に処して一体自分はどうしたら良いのであらう。結局時と共に進むのか (9/10) ハワイ帰りの連中が有頂天になっている。彼等には国家も何もないのだ…自己の繁栄さへ達せば満足なのである。なさけない奴等 (9/11) 聴聞会であった。聴聞者は吾々と同等のインタニーである。彼等には良心も何も無いのである。当局の願ふままに犬的行為を白昼行っている。(9/27)		昨週より又聴聞会…無条件帰国云々の説明を求めれば、トウゴクするとかタタクとか(9/30)	
10		帰国帰還等色々噂があったが、此の様子では此処二三カ月は大丈夫らしい(10/10)	ともすると自分等の生活はこれが普通であるくらい思はれるやうな気もする時がある。沙婆のことも忘れてしまったやうな気がする。 (10/12)			
11	来た、来た、来たぞ、待ちに待った、四か年待った。…何にたとふべきか、此の喜びを。…知らせを聞いた時には只目に涙あるのみであった。国に帰る吾が国に(11/16)	夜の一時を不可思議な現状を物語る…休戦前日まで日本艦隊は何処に出でて戦へよと云ひつつあったのだ。それに翌日からは日本艦隊全滅とは(11/1)	一度放棄した市民権を又取もどすとさわいでいる人もあるらしい。(11/5) ハワイ組の帰希…我々も十一月十五日より乗船帰国するやうになると今日は盛んにラヂオで放送(10/30)			未だ帰国を取止めたい希望の者は申出よといっている。 (11/10)
	午後三時、今となって当副所長曰く、今にても帰国取けしたき希望者は当ホールの役員に申出よと、此の裏には確か何かがあると思う。 (11/19) 出発は明午前八時に決定。時も時ハワイ方面から快ニュースが繁々として入って来る。敦賀方面の大空戦一分間にして敵機五千撃墜と。心立つ。(11/20)					
	帰国の途につく					

表4	日本側の要因		個人的要因と日系人相互関係が生み出す要因		米国側のもつ要因	
	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因	日本を志向させる要因	米国を志向させる要因
1945/1			後に残った団員諸君の事を想ふ時感慨無量である (1/2)			
			鶴湖より便が段々と来ている我々の予想以上に彼等も頑張ってくれているらしい (1/4)			
	何でも今年中の良い時期を見て交換船があるらしい、今突然その話が出た(1/22)	呂宗島リンガエンに約六萬の米軍が上陸したのは事実らしい。…日米否今次世界大戦争の勝負場…思はずこぶしをにぎる(1/10)		米軍服を着けて歩くインタニーもあまり目障りにならないやうになった(1/19)		
	交換船も事実らしい。鶴嶺湖の日本人に特に興味を持っているとは(1/23)					
	最近ハワイ、米本土間に於て頻繁に米艦船が我潜水艦の為に撃沈されている (1/31)		ハワイの人々は自分の子が米軍隊に出ている視帰れる話(1/24)			
22			当所内には、約三つの大きなグループがある様だ、即ち帰国者、ハワイ帰還請願者、どうやむや、即ち半ば米国忠誠者か(2/6)			
			ハワイ帰還請願者は勝手のいい解釈ばかりしている (2/12)			
	東京より海外同胞に告ぐ…たとへ戦局が如何に変化しやうとも絶対に心配は要らぬ…心配無用也(2/18)	一千五百機の米空軍が本日東京一帯を襲ったらしい (2/16)			彼等はおそれているのか我々をあの手この手で圧迫しやうとしている(2/24)	
		米軍は硫黄島に上陸したらしい…いよいよ戦局は緊迫しつつある祈る皇国必勝 (2/19)		加洲へ帰還する人も大分あるらしい。放火事件…発砲事件もある(3/5)	当局は何故か多分ベストの野郎共が要らぬ口をたたくに違いないが…我々鶴湖組を頭からおさえんとしている(3/9)	
3/31	騒動					
			自分は何故に先般の不祥事が起ったか又我々三百五十余名が二重柵の中に入り込んで来たか、何事も眼前に起ったことながらさっぱり判らない(3/16)			
					午前八時突として橋、津波両氏が理由不明の儘拘引。他所に護送するとのことで多数の人々がゲートで見送の為集合…官憲はいたずらに解散を命じた…彼等は非道にも催涙弾を約十個ばかり投げた…	
					聴聞会に出頭…彼等の生意気な態度がシャクに障はる、司法省の官史さんがこのくらいである、全米人を押して知るべし(3/24)	
	やれ今日も一日日本に帰れる日が来たと安らかに午后十時床に着く(3/27)				脅迫状を所長や手紙検閲者に送ったとかで騒いでいる。我々の全然関知しないもの…彼等の聴聞の仕方は我々を頭から馬鹿にしている (3/25)	
	二重柵からの解放					
4		沖縄島に上陸開始(4/1)				各転住所もあの手この手で圧迫し、出所を促がしているやうだ。当所の当局も気持の悪い程機嫌が良い (4/2)
		日ソ不可侵条約の放棄、小磯内閣の解散、又東西両洋の戦局などで今米国では有頂天…今に後悔する時が来る(4/6)			当局の引続く圧迫に我々の運動も今では立消への状態 (4/8)	
						ルーズベルト大統領逝く東部時間三時三十五分(4/12)
5		昨夜独逸は無条件降伏…これから太平洋戦も本格化する…心の底より祖国の必勝を祈る(5/7)			当抑留所に入所以来四回目の聴聞会…ＦＢＩなどの記録や当所の記録だと(4/23)	
	祖国の父母は御健在なるやもう田植の支度などで忙しくなって来るころ…遠く離れた敵国に居る自分としては何かすることも出来ない(5/10)	マリアナ方面より米艦隊が北進中…日本では厳重監視中…(5/18)	ハワイ組の子息を米兵に出して居る連中がパロールになるとかの話。別に彼等に批評する必要はない。実際情けない奴等だ。(5/23)		裏港会談が開始…如何にして平和を持続すべきらが主らしい。面目枚は美しくても王さんになろうとする… (4/25)	
		欧州戦終了後の米国内放送新聞雑誌等あらゆるものは対日戦に関して…何故か祖国は爆弾の被害を赤裸々に発表(5/29)				
6	昨年十二月七日付けの東京印である懐かしい父上より御手紙が届いた。セキジュジツウシンウケトリアンシンシマシタ、コヂライヂドウブジハヤクキコクトゴケンコウヲイノ(6/20)					
	交換船があるやも知れずの話大島大使一行に関して出た噂(6/30)	沖縄もとうとう敵手に陥ったのであらう。今后の戦こそ決戦と云はれる(6/29)				

の把握は、敗戦まで、意外なほど冷静である。

短波で盗聴です。その内容ね、私が機械操作してね、もう一人は名前忘れたんですが、事務出身の方がね、速記をずっとして、それを発表する場があったんですよ。毎晩食事の後に、何時から30分なら30分、時局講演らしいような、立ち代わり、入り代わってね。そこへ、○○方面のニュースというのが私らの担当やったんですよ。東京放送を傍受するいうのが。こういうニュースがキャッチできたんじゃが、いうのは橘さんや年の多い人に相談に行ったことはありますよね。それは伏せておけ、いうようなことがありました。東京放送もね、時間帯はね、30分か……連続じゃないんですから。……長く１時間くらい地下にもぐっとったですかね。そのくらいでした。[18)]

終戦の玉音放送も聞いたという。

おそらく、彼は、戦況については、収容所内で最も多くの情報をもっていたはずである。日本からの情報と、アメリカ側の情報と、その上、収容所内で、その情報を操作していた指導者たちの考えも聞くことができた。

興味深いのは、むしろ、一旦敗戦を認めたあとの、デマの影響である。たとえ戦前の日本の軍国主義的教育の影響を受けていても、日本しか知らない人々はいざ知らず、アメリカの圧倒的な物量を知る日系人が、本当に日本の勝利を信じることができたのだろうか。戦争を知らない世代の筆者の素朴な疑問は、軽くうち破られてしまう。

「日本は一大反撃に出て連艦二千余関滅余ス百余隻ヲ☆捕（8/23）」「ニュースはブラックである。デマは飛び放題である。デマ宣伝の偉力を初めて味はされつつある（8/24）」「デマか事実かキャンプ内を横行している。五十隻の戦艦に護衛付きで我々を迎えるとか、七、八日の大海戦とか、米側の報道に比べると雲泥の差（8/29）」……

そして1945年11月16日、ついに送還船の出発を告げられる。「来た、来た、来たぞ。待ちに待った、四か年待った。……国に帰る吾が国に」と文字が踊る。「帰国を思いとどまってもよい」、という副所長の言葉に「此の裏には確か何かがある」と勘ぐり、出発当日にも敦賀の大空中戦で一分間に五千機の敵機撃墜というデマを信ずるところが何ともいじらしい。日記には、敗戦を認めたらしい表現が多くみられるが、それでも勝利を信じていた、と彼は語る。「涙が出ましたよ。戦勝国へ帰ったと思って。」

その後

最後まで、日本の敗戦を信じられないままの「帰国」であった。一体彼らはいつ敗戦を認識したのだろうか。

船頭さんが答えられなかった。「上陸したらわかる」いわれたの、本当にわかりましたよ。方々に焼夷弾、爆弾の穴があいているんですよね。でもう、皆、家らしい家はない。どういうんです、焼けただれた鉄板を敷いて、仮住まいの……そして、携帯用でもって帰っ

たんじゃが、トランクの中に、タバコとかマッチが、それから石鹸、何個ずつかありましたがね、その久里浜の収容所におる時に、皆、食糧と替えましたよ。通りまで下ると通行人がおるんですよ。煎子とか魚の干したんとか、お米もね、茶碗にいっぱいくらいもらった覚えがありますよ。1週間あそこの収容所におる間に、ほとんど、トランクの中は空っぽになりましたよ。……[19]

それでも、氏の場合は、帰国を後悔したことはないという。収容所内で身につけたラジオの技術を生かして、帰国後まもなく電気器具取扱店を開いている。戦後の生活が安定していたことが、彼に「後悔はない」といい切らせるのであろう。

当時ね、職業いうのは、日本人の職業いうのはほとんどなかったです。とにかく食べることが大変でした。その、食べるこというのは、幸い私の家が農家で。20年の暮れに帰ってね、24年ここで商売始める間、4年間ずうっとこれで食べていけました……収容所の暇に任せて、勉強したんですよね。それが一生涯の飯を食う糧になりました。[20]

まとめ

氏の日記の記述を中心に、「帰国」者の日本への志向性とアメリカへの志向性を与える要素をまとめたものが表5である。

当初予想していたような、日本人としてのアイデンティティや、戦前の日本における教育の影響と思われる日本に対する愛国心などは、特に最初の段階では、ほとんど表面には表れてこない。むしろ、「忠誠登録」から隔離にかけての第一期に、彼の脳裏あるのはただアメリカに対する反発と期待だけであるように思われる。隔離までは少なくとも「帰国」の意志がなかったことは事実であろう。日記の上に、変化が表れるのは、ツーラレーキや、サンタフェへの移送により、日本への「帰国」というものが現実

表5　日本及びアメリカへの志向性を与える要因

	日本への志向性を与える要因	アメリカへの志向性を与える要因
日本のもつ要因	日本人としてのアイデンティティ・愛国心 日本での生活・教育体験 日本在住の、或いは帰国希望の家族 戦況 帰国の可能性――交換船の噂	日本での生活の不安（純二世の場合） 言語、生活経験の欠如など アメリカへの恩義
米国のもつ要因	排日運動の歴史と将来への不安 強制立退き・収容政策に対する反発 WRA及び米国政府への不信	米国市民としてのアイデンティティ・愛着 米国在住の、或いは残留希望の家族 緊急避難として収容所の評価 WRA及び米政府への期待 戦況
他の日系人との関係	相乗的に強められる愛国心、群衆心理 米国寄りの日系人への反発	米国への再定住する人々との比較

味を帯びて来る頃であり、帰国申請、市民権放棄への動きがその要因となっているように思われる。

証言の折りには言下に否定されたが、氏のアメリカ人としてのアイデンティティは、日記のあちこちに散見できる。強制立退き、収容政策に対する反発は、彼らに「日本」を志向させる最大の要因であろうと思われるが、デモクラシーの国アメリカに対する期待や未練もまた、氏の表現の端々に感じられる。結局は、市民権を侵されたことに対する、米政府への不信、収容所内での諸問題に対するWRAの対応に対する不信から、将来の「アメリカ」における生活への希望を失ってしまうわけだが、こうした場合、戦前の排日運動に不慣れであった帰米二世は、こうした市民権の侵害により敏感であったということも考えられる。一方で、文字どおり「緊急避難所」としての収容所生活への評価は、ツーラレーキへの移動を躊躇する場面や、最後の最後に尚、日本への「帰国」に対する迷いを見せる場面などに、読み取ることができる。

日本への「帰国」後の生活への不安は、純二世の場合などに顕著であるが、氏の場合にも、「自由な国」アメリカと対局の国に「帰る」ことの不安を見せている。家族についても、氏の場合、父母は日本に、長兄と次兄とは米国におり、長兄は結果的に「アメリカ」を選んでいる。家族に関しては、両方の国に引き付ける力は働いていたものと思われる。

「日本」のイメージが形をなしてくるのは、「帰国」が現実味を帯びてきた後のことである。第三次交換船の噂は何度か表れ、そして消えていく。交換船による「帰国」の可能性が、彼ら「帰国」希望者の期待をつなぎ止め、「日本」への傾斜を増幅したものと考えられる。

そして、最後に、日系人相互の関係についても見ておこう。「日本」への忠誠を待つ集団の中で、相乗的にたかめられていく、一種の群衆心理と逆に、米国への忠誠を表す者に対する反感が鮮かな対照となす。WRAやアメリカ政府の政策に積極的に協力する二世たちや、親米的なハワイ出身者に対する反感や、「忠誠」組が、いざ徴兵と聞いて逡巡する様子に同情しつつも、自分のとった道が正しかったのだと確認していく部分など、その裏にある彼の「揺らぎ」「迷い」をみることもできる。

1）「忠誠」登録は本文中にもあるように、陸軍の募兵とWRAの出所のための手続としての登録で、正式名ではない。忠誠を問うことが目的であったが真にこれを確めることはできなかった。

2）1985年度並びに86年度トヨタ財団研究助成を受けて「日米戦時交換船・戦後送還船“帰国”者に関する基礎的研究」として、主として資料の収集・整理を目的として行った共同調査（共同研究者は粂井輝子長野県短期大学助教授）であり、本稿は、同じく1992年に同財団よりの助成を受けて発表した同題の報告書（1992年６月30日発行）の担当部分を加筆修正したものである。尚、本稿の内容・分析に関しては、筆者が責を負うべきものである。

3）大規模な共同研究であったわりには、直接の成果は多くは発表されていない。Thomas, Dorothy Swaine and Nishimoto, Richard S., *The Spoilage*, University. of California Press,

California, 1946. Dorothy Swaine, *The Salvage*, University. of Press, Berkeley, 1952.Grodzins, Morton, *Americans Betrayed:Politics and the Japanese Evacuation*, The University. of Chicago Press, Chicago, 1949.等

4）De Cristoforo, Violet Kazue Affidavit : Challenging the Inaccurate, and Misleading and Denigrating References and Accusations Made by Rosalie Hankey Wax in *Doing Fieldwork : Warnings and Advice* and in *the Spoilages* at Tule Lake, 1944－45.

5）Sandra C. *Jewels of the Desert:Japanese American Interment at Topaz*, University of California Press, Berkeley, California, 1993.

6）Hosokawa, Bill, *Nisei : the Quiet American*, William Morrow, 1969. 他 Hosakawa, *JACl in Quest of Justice*, William Morrow, 1982.

7）Daniels, Rogrs, *Concentration Camps USA : Japanese Americans and World War II*. Holt, Rinehart, and Winstons, 1971. 等一連の著作。

8）Jeanne Wakatsuki, and Houston James D. *Farewell to Manzanar*, Houghton Mifflin, 1973.

9）例えば、Okihiro, Gary Y. "Religion and Resistance in American Concentration Camps" *Phylon* 45－3, 220－233. などが挙げられる

10）Richard. *Keeper of Concentration Camps : Dillon S. Myer and American Racism*, University of Calfornia Press, 1987.

11）Hansen, Arthur, ed, *Japanese American World War II : Evacuation Oral History Project*, Meckter, 1990.

12）Nomura, Gail. M. "Interpreting the Historical Experience" Nomura, Gail M., Endo, Russell, Sumida, Stephen H. Long, Russell C., ed. *Frontiers of Asian American Studies : Writing, Research, and Commentary*, Washington State University Press, Pullman, Washington, 1989. P. 1本書は1988年3月にワシントン州立大学で開かれた同じテーマで開かれたアジア系アメリカ人研究学会の第5回全国大会で発表された論文や文芸作品の一部であり、文字通り、調査法、理論、方法論の動向と新たな地平を模索しようという意欲的な試みであった。

13）厚生省援護局『引揚げと援護の歩み』（昭和52年）の民間人の引揚げに関する統計の中にこれらの人々は含まれていない。

14）粂井輝子、村川庸子「『不忠誠組』と呼ばれた戦後送還船『帰国』に関する一覚書『歴史学研究』（1988.6.）62－71.

15）～19）佐々木真奎氏（広島県在住）に面接（1988年3月30日面接）

ABSTRACT

In 1942, shortly after the Japanese attack on Pearl Harbor, all the people of Japanese ancestry including native-born American citizens, were removed from the west Coast and incarcerated in relocation centers. There they were asked whether their loyalties were Japan or the United States : the notorious "loyalty questionnaires" In a sense, the test was more painful to those people than the loss of property or the evacuation itself. Different answers by family or community members meant splitting families or communities, becausethe "no no boys" — the disloyals — were to be segregated and sent to a different camp. Some of them were even deported eventually back to Japan. By analyzing the diary of one repatriate, the present writer traces the struggle of a man with two quite different cultures to establish his national identity.